

# 風邪(感冒)の話

## 感冒の原因

日常、我々が感冒を稱してゐるのは身體がぞくぞくして寒氣を感じ、續いて發熱したり、時に鼻汁、咽喉の痛みを生じたりする様な病狀を云つて居ります。併し、斯様な不定の症狀は多數の發熱性の病氣の殆んど總てが發するものですから、普通の感冒をその他の發熱性病(例へばチフス、肺炎、マラリア、結核等)の初期との差別はなかく、困難であります。従つて「感冒は萬病の基」ともいふが初めからそれが感冒ではなくして、元來獨立した病氣の初期の症狀である場合が相當に多い様であります。

寒さに當つて間もなく感冒の症狀を現はす場合は、寒さそのものが病氣の原因となることもありませんが、多くはそれが誘因になつて身體の抵抗力が弱つて、種々の病原菌が

醫學博士 廣瀬 興

發育し、そのため、鼻カタル、咽頭カタル、氣管枝カタル、續いて肺炎等を發するのであります。ですから、その病原菌も種々であつて一定したものではなく、インフルエンザ菌などもその一つであります。

## 感冒の症狀

感冒は前述の様に寒さに當つたり、寢冷えしたり、湯ざめしたり、或は平常寒さに當らぬ襟首の様な所を冷したり、或は寒さの上濕氣に遭つたりした後で、ぞくぞく身體に惡寒を感じ、次いで頭痛發熱し、所謂、感冒といふ状態になるのですが、單にこの位で一兩日中に治つてしまふこともあり、或は續いて鼻、氣管、肺等の呼吸器の方まで侵して、だん／＼重くなり引いて、他の病氣を續發したりする様になります。

その侵される程度や部位によつて次の様ないろ／＼の症状を呈します。

### 一、急性鼻カタル

鼻の粘膜が侵され、發赤腫脹で、三十八九度に迄發熱するこゝがあり、頭痛、睡眠不安、食思不進、初めは水鼻汁を出すが後には粘液性や膿性の鼻汁を出す様になります。乳兒であるならば鼻粘膜が腫れるために、鼻腔が狭くなり、鼻呼吸が障礙されて哺乳困難となり充分に榮養が攝れず、不機嫌となり、或は終日乳房を離れないため消化不良症を起し却つてその續發症のために重症に陥るこゝがしばしばあります。乳兒の頑固な鼻閉塞は微毒性のこゝが多いから注意が肝要です。

尚、病變が鼻の後方即ち鼻咽腔の方まで進むこゝ、一層くいやみ、鼻血を出したり鼻聲になつたりします。乳幼兒の鼻血は鼻腔デフテリアの初期のこゝがあります。或は鼻咽腔と耳の奥(中耳)は歐氏管といふ細い管で連絡してゐるため、その方へ進行して、歐氏管カタルを起し、爲に耳痛、難聽を來たし、更に増悪するこゝ急性中耳炎となります。こ

の時は始め耳鼓の後方の骨の突出した部を指で壓えて見るこゝ特別に痛みを感じるので早期に診斷が出來ます。そして次いで鼓膜を破つて耳漏となり高熱を發し、遂には生命にもかゝはる様な重症となるのであります。

### 二、急性咽頭カタル

之は「アンギーナ」を云つて咽頭の入口扁桃腺附近が腫れ、急に三十九度以上にも熱を出し、咽頭痛、嚥下困難、疼痛性の咳嗽、乳兒なれば乳吐を來します。扁桃腺や顎下腺が腫れて遂には扁桃腺炎、顎下腺炎を起し、手術を要するこゝがあります。扁桃腺肥大のため毎年冬期、本病に苦しめらるゝ小兒は適當の時に摘出手術をする方がよろしい。

### 三、流行性耳下腺炎

鼻カタルや咽頭カタルに引き續き又は併發して、耳下腺の發赤腫脹を來し一夜にして耳下が膨大に腫れ、高熱を發し、流行性に來るこゝがあります。俗に「おたふくかぜ」であつた特別の細菌のためであるとも云はれてゐます。本病は感染してから症狀の現れる迄即ち潛伏期が甚だ長く十八

日乃至二十日もかゝるものであります。本病の徴候のある小兒は直ちに登園を禁し、時には一時、幼稚園を閉鎖せねばなりません。

#### 四、急性喉頭カタル

咽頭の奥即ち喉頭部が主として侵されるのであつて、輕症の場合には微熱、聲音嘶嘎、粗糙の咳嗽、喉頭痛等であるが、重症のときは假性クルト、ブ、ミ云つて『デフテリア』の如き症状を發し犬吠様咳嗽ミ云つてゴウ／＼犬の遠吠への様な咳を突然夜間に發します。又呼吸困難、聲音嘶嘎、顔色蒼白、脈搏頻數、胸骨上窩及心窩部の吸氣時陷没現れ、冷汗全身を被ふこいふ様な高度の喉頭狹窄症狀を發します。斯様の發作は發數乃至二三時間で止み、再び安靜になつて漸次治るこもあり、又二三日發作を繰返すこもあります。素人には『デフテリア』との區別は困難であるが、デフテリアは斯様に突然發現するこも少く、多くはその前に發熱其他の症狀が漸進的に來るのが普通で、又デフテリアの義膜(咽頭に生ずる白い苔様の附著物)を發見するこがあります。

#### 五、急性氣管枝カタル

病變が尙一層深部に進行した場合で主要症候は發熱ミ咳嗽でだん／＼喀痰を多く出す様になります。乳兒に於ては概して重症ミなり、嘔吐、下痢、食慾缺乏、體重減少、呼吸困難を來します。

#### 六、毛細氣管枝カタル及氣管枝肺炎

前述の氣管枝カタルの病變が一層進行して深部の毛細管枝を侵した場合を云ふので更に進入し肺氣胞にまで達するときは、氣管枝肺炎又はカタル性肺炎ミなるのであります。是等の場合は咳嗽、高熱、呼吸困難、『顔色蒼白』は必發の症狀であります。咳嗽も初めは乾性有痛性であるが、末期には無力性ミなります。熱は高低甚しく朝は却つて低く、午後三九度乃至四〇度に達するこがあります。呼吸は促進して淺表性且つ不整で多くは喘鳴を伴ふものであります。呼吸數一分間六〇乃至一〇〇に達し、呼吸數ミ脈搏數ミの比は平常生理的には一ミ三乃至一ミ四の割合であるのに本病のときは殆んど一ミ二に増加するのが特長であります。

尙呼吸の時心窩部が陷没したり、俗に云ふ『小鼻が動く』

即ち鼻翼呼吸を來す様になる。又肺の呼吸する部分が少くなるため、酸素缺乏し、口唇や爪甲が紫白色即ちチアノーゼが現れ、四肢が厥冷し重態となるのであります。

氣管枝肺炎は子供の年齢が小なる程危険で其の死亡率は乳兒は六六%、二歳では五五%、三歳では二三%、四歳では一六%といふ様な割合です。

## 七、流行性感冒

流感即ち『インフルエンザ』は一種の病原菌のために發する感冒であつて、傳播甚だ迅速で大流行を來すものであります。明治二十三年（一八九〇年）大正七年、大正九年に於て世界的の流行を見、乳兒妊産婦の甚しい死亡率を示したことは我々の熟知のこゝであります。

本病の潜伏期は一乃至四日、其後惡感、倦怠、食思不振、不安、頭痛、鼻カタル等の前驅症に次いで體温卒然三十九度以上に昇り、嘔吐及び劇しい頭痛、頭痛腓腸筋痛（足のふくらばみ）腰痛等を起します。其後の経過はいろいろで主として現れる症狀では、（イ）胃腸型、即ち食欲缺乏、嘔吐、腹痛、下痢を主症とし、往々口唇匍行疹を現はします。

（ロ）呼吸器型、即ち劇しい咳嗽其他氣管枝カタルの症狀の著しいもの。（ハ）神經型、即ち頭痛、筋痛、不安、不眠、痙攣、昏睡等の腦症狀を現はすもの、如く種々の型がありますが、互に移行して區別するこゝの出来ない場合があるのであります。

乳兒流行性感冒は殊に重症で大正九年に於ける死亡率は小兒一・五五%でありましたが乳兒は三〇—四〇%といふ様な高率でありました。

以上の他、感冒は肋膜炎、急性リユウマチス、腎臓炎、神經痛等の前驅として現はれる場合もあります。

## 感冒の豫防（第十一月號參照）

感冒の原因は本體がいかいふものが前述の様いろいろでハッキリして居りませんから、豫防といふことも一口には云へない事になります。兎に角、寒さといふことが原因をか誘因さかになり身體の抵抗力が弱つて始まるのですから、平常少しの寒さの變動や何かにも耐え得る抵抗力を養つておくことが必要であります。前號にも述べましたが一般に夏期、薄着や海水浴などで折角出來た皮膚の鍛練の習

慣を失はぬ様に心掛くべきであつて、夏期から秋冬にかけて特に冷水摩擦、乾布摩擦、日光浴等を勵行したり、又間接に一般に榮養を充分に攝るこゝ、特に虚弱の乳幼児は是非母乳で育て、尙肝油、鰵、かき、肝臓料理を與へて、ビタミンや脂肪其他の、充分の且つ偏よらぬ榮養成分の補給を忘れてはなりません。又襟巻、厚着、行火、こたつ等の悪習慣をさけたりして且、暖房の餘りあつたか過ぎる室から急に冷寒の戸外へ出るこゝ等の注意が必要です。

又乳幼児の入浴は隙間風の入らぬ所ですることです、或ひは汚れた『おしめ』や濕つた着物は早く換へてやることです。大人も同様、入浴の習慣は豫防の效が大にあります。

埃の多い日なきの外出から歸つた時、二%硼酸水、一%過酸化水素水の合嗽も大切であります。

小兒に鼻呼吸の習慣をさせるこゝも良いこゝであり、又埃の多い所や人込みなきは『マスク』を用ゆるこゝも有効であります。

室内の掃除は度々行ひ又學校の教室や幼稚園託兒所の遊戯室なきは新聞紙を水に浸してポロ／＼したものを散布

して掃き集める様にするこゝほこりも立たず、大變よいのであります。衣服なき冬期は特に度々日光に晒すこゝが大切であります。

特に重要な豫防法は平常、精神の安靜、こいふこゝで生活の不安、睡眠の不足なき注意すべきであります。

### 感冒の手當

身體が何んかなくだるくぞく／＼寒さを感じたり、頭痛、食思不振になつたりして、次いで發熱して來たならばそれが果して感冒かさうかわからぬ場合でも、着物を多く着るこゝ、温い食物を攝るこゝかして、平常より安靜にし、勿論外出なきひかへねばなりません。

幼兒なき發熱して少し赤いボツ／＼でも出るこゝ麻疹ではないか案じて高熱でも頭を冷すこゝはいけなにか考へる習慣がありますが、そのため却つて病症を重くしたりひきつけたりする事があります。よし、『はしか』になつてもかまひませぬから、頭だけは冷して身體の方には湯たんぽ其他で温かくしてやる様にする方が安全であります。

『アスピリン』等の下熱劑も一回二回は用ひてよいのです

がそれでも治らぬときは勿論素人療治は危険であります。

鼻カタルや咽頭カタルを起したときは、二%重曹水の吸入やルゴール氏液の咽塗が有効であります。又咽頭痛や耳下腺の腫脹の恐れがあるときは冷濕布、エキシカアンチフロヂスチンの塗布も大切であります。又ユーカーリ油の吸入も氣分を爽かにして相當の效がある事もあります。

氣管枝カタルや肺炎等の心配のある場合は胸部の温濕布、吸入を忘れてはなりません。室内に過度に蒸氣を立てる習慣があるが、餘り湿度を高めることはよろしくない。却つて近時、外氣を室内に入れる療治さへある。

要するに俗に云ふ感冒といふのは一種の定まつた形の病ではなく、色々の病氣の初期の總稱でありますから、初めに早く用心して、無理をせぬ様に心掛けるのが大切であつて、それだけで軽く治つてしまふものであります。

『風邪は萬病の基』と申しますし、實際に於いてそうでありますから、『あゝ風邪だよ、たいした事はない』、『風邪位なんだい』と云つた言葉は私達の世界から葬むつて、お互に身體を強健に丈夫に楽しく一日を過す様に努めませう。

## 童 謠 集

### 板橋わたる

阿 部 正 矩 著

著者は、童謠界の權威者 葛原齒氏の愛弟子、詠まれた八十八の詩は、何れも幼き者へのよき贈り物であると同時に、幼稚園の先生が常に手近において觀賞すべき好著と思ひますので誌上に御紹介いたします。

東京市本郷區西片町一〇

發行所 日本童謠社出版部

定價 一、二〇